

近代

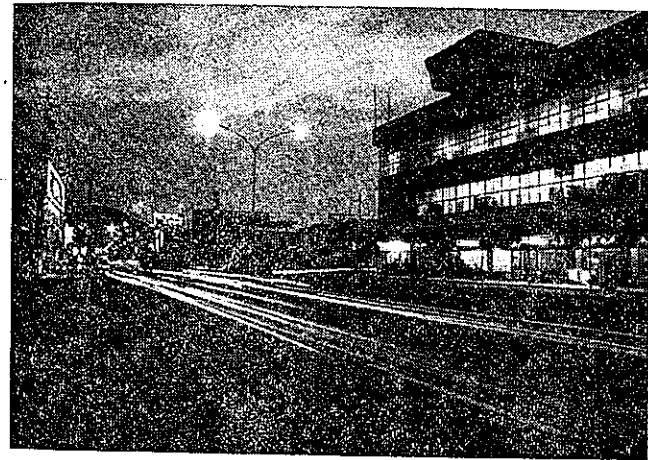
四国新道があった。明治十九年四月、琴平で、四国新道起工式が行なわれた。四国新道は、丸亀から琴平に出て、阿讃山脈、四国山脈を横切り、徳島県の三好郡を経て、高知にいたる道路であった。二十二年（一八八九）四月、この道路が竣工したとき、金刀比羅宮の宮司であった琴陵宥常ことわかゆつねは、桜の木八千本を寄付した。桜の木は、琴平―多度津間と、丸亀―金蔵寺間に植えられて、美しい花街道となり、珍しい近代道路建設として、話題をにぎあわした。

四国の道路は、海岸線に沿った道路が多く、四国横断の道路ができたことは、画期的なことといえよう。丸亀市には、現在高松―松山を結ぶ国道十一号線と、十四の県道、四百六十の市道が、網の目のように通じている。

新国道の完成

丸亀市内の国道は、土器町の宇夫階から、二軒茶屋、土器橋、御供所町、北平山町、西平山町を経て、通町を外堀沿いに出て、南条町から中府町を通り、田村を通過する線で、普通に国道と呼ばれていた。昭和二十七年政令で、その名称が国道二十三号線となった。そして国道は、宇夫階から土居町の渡場を通り、外堀に沿う線に路面が変更された。国道の変更により、土器川にかけていた橋が、二十四年六月に完成し、蓬萊橋と名付けられた。昭和三十三年六月に、国道二十三号線は十一号線に改称された。三十八年、琴平参宮電鉄が電車の運行を廃止したので、土器川西詰から普通寺市金蔵寺町にいたる電車軌道を、国道十一号線に転用した。そして、翌年十一月から四十年にかけて、コンクリート舗装が行なわれた。

風袋町の堀川橋西詰から、城西町の十字路までの通りは、この国道の完成を記念して、一般から愛称を募集し、「京極通り」と呼ぶようになった。この長さは千三百七十四メートル、幅は二十四・五メートルで、一部には、中央に幅一メートルのグリーンベルトが設けられて、緑を添えている。また、街路灯も丸亀市照明近



夜も明るい京極通り

代化委員会が振分灯を取り付けた。この連なる灯は、夜間あかあかと輝き、丸亀の風物となっている。

国道の交通量ははしだいに増加し、ことに自動車が増増して混雑し、一つの蓬萊橋では交通が渋滞して困るようになった。そこで南側に、もう一つの橋をかけて、複線橋とする意見が強く出された。この要望にこたえて、四十一年九月に、県下はじめての複線橋が架設され、国道の交通は大いに緩和された。